

13. 剖検時に特徴病変の認められなかった伝染性ファブリキウス囊病の一例

大分家畜保健衛生所・¹⁾ 玖珠家畜保健衛生所
○病鑑 大木万由子・病鑑 平松香菜恵・山崎窓¹⁾

【はじめに】伝染性ファブリキウス囊病（IBD）は、鶏の急性ウイルス感染症で届出伝染病に指定されている。治療法はなく、種鶏およびコマーシャルひなへのワクチン接種や衛生管理が予防の中心である。今回、IBDワクチンを接種している県内の1肉用鶏農場で死亡羽数が増加し、剖検時にファブリキウス囊（F囊）に病変が認められなかったものの、病性鑑定の結果、IBDと診断したのでその概要を報告する。

【発生状況】当該農場は約17万羽を計30鶏舎で飼養。初生でマレック病、鶏痘、鶏伝染性気管支炎（IB）、ニューカッスル病（ND）ワクチン投与、農場で14、21日齢時にIBDワクチン、28日齢時にNDワクチンを飲水投与。2020年6月に、家保が40日齢前後の鶏で死亡羽数増加の届出を受け、農場立入を実施。A型インフルエンザイムノクロマト検査で陰性を確認後、衰弱鶏6羽について病性鑑定を実施。

【材料および方法】細菌学的検査、寄生虫学的検査は定法に基づき実施。病理組織学的検査は主要臓器、脳、F囊、胸腺、消化管、坐骨神経に対しHE染色およびF囊のIBDV免疫組織化学染色（免染）を実施。ウイルス学的検査では腎臓、F囊、肝臓、脾臓、胸腺、筋胃および腺胃についてIBV、IBDV、鶏貧血ウイルス（CAV）および鶏アデノウイルス（FAdV）の遺伝子検査、ウイルス分離およびIBDV抗体検査（プレ血清：衰弱鶏6検体、ポスト血清：5日齢10検体）を実施。

【成績】剖検では、腎臓の腫大（6/6羽）、盲腸の暗赤色化および盲腸内の血便（6/6羽）を確認。細菌学的検査では有意菌分離陰性。寄生虫学的検査で小腸および盲腸内容物から多数のコクシジウムを検出（6/6羽）。病理組織学的検査でF囊に間質の炎症性水腫、リンパ濾胞壊死（6/6羽）、盲腸扁桃のリンパ球減少（5/6羽）、免染でF囊にIBDV陽性反応を確認（6/6羽）。その他、十二指腸～盲腸に重度のコクシジウム寄生（6/6羽）等が認められた。ウイルス学的検査では、F囊でIBDV特異的遺伝子を検出（6/6羽）、RFLPで既存のIBDV株と異なる切断パターンを示した。IBV、CAV、FAdV遺伝子は不検出、IBDV分離陽性（6/6羽）、IBDV抗体検査ではプレ血清で4/6羽陽性、ポスト血清で10/10羽陽性。以上の結果から、IBD・鶏コクシジウム病（6/6羽）と診断。

【まとめ】今回は肉眼的にF囊に病変はなく、腎臓の腫大という所見から当初IBを疑ったが、家保の適切な採材（F囊の生・ホルマリン材料）があったためIBDと確定診断できた事例である。鶏の病性鑑定において、IBD等の診断率向上および類症鑑別のために、鶏の病性鑑定ではF囊の生材料の採材も必要であることを確認。また近年、特徴病変の認められない伝染病の発生報告もあることから、疾病に関する知見を広げ、診断精度の向上に努めることが求められる。